

229 若年者(40才未満)肺癌症例の臨床的検討

県西部浜松医療センター胸部外科¹、呼吸器科²
○佐々木一義¹、半沢備¹、山川久美¹、西脇巨記¹
橋爪一光²、笠松紀雄²、黒須克志²

目的：比較的稀と考えられる若年者肺癌症例についてその特徴を明らかにするために、自験例を集計して臨床的検討を行った。

結果：1990年6月までに当施設で診断、治療した原発性肺癌のうち40才未満の症例は28例であった。男性15例、女性13例で年齢は23才から39才、平均33.6であった。喫煙歴を有する者は12例(42.8%)、うち喫煙指数400以上は5例(最高600)と少なかった。組織型別では腺癌22例、扁平上皮癌2例、大細胞癌3例、腺扁平上皮癌1例と腺癌が多数を占めていた。発見動機別では検診発見例が9例(32.1%)と若干高率であったが、一方、遠隔転移に由来する症状を主訴としたものも4例あった。病期ではI期3例、II期4例、III A期3例、III B期6例、IV期12例となっておりIII B期とIV期で18例、64.3%を占め高度進行例が多かった。10例に切除が行われ切除率は35.7%と他の年齢層に比べ大差は認めず、切除例の5年生存率は51.8%と比較的良好であったが、非切除例では生存期間中央値4.8カ月と極めて予後不良であった。

まとめ：若年者肺癌症例では相対的に女性の比率が高く、また腺癌例が多数を占めた。発見時すでに高度に進行した症例が多く、それら非切除例の予後は不良であった。

231 若年者肺癌の臨床的検討

大阪府立羽曳野病院 内科¹、外科²
○紙森隆雄¹、福岡正博¹、工藤新三¹、今村純孝¹、山本信之¹、
伊藤和信¹、中川和彦¹、益田典幸¹、瀧藤伸英¹、松井 薫¹、
高田 実¹、根来俊一¹、楠 洋子¹、古武彌宏²、安光 勉²

【目的】若年者肺癌の特徴を明らかにすることを目的とした。

【対象】1976年より1988年までに当院に入院した40歳未満の原発性肺癌症例を対象とした。

【結果】症例は20歳から39歳までの60例で、このうち30歳未満は9例であった。男女比は2.5:1と40歳以上の症例と比較して女性が多く、組織型では腺癌29例(48.3%)、小細胞癌14例(23.3%)、大細胞癌6例(10.0%)、カルチノイド4例(6.7%)、扁平上皮癌3例(5.0%)、その他4例(6.7%)と腺癌が多かった。臨床病期分類ではI期9例(16.4%)、II期1例(1.8%)、III期20例(36.3%)、IV期25例(45.5%)であった。内科治療41例、外科治療19例について予後を見ると、median survival timeはそれぞれ196日、540日、1生率はそれぞれ23.8%、46.7%、5生率はそれぞれ8.1%、38.9%であり、生存率曲線では若年者と40歳以上に差を認めなかった。さらに、30歳未満の症例について検討すると、男女比は1.3:1と女性の比率がさらに高くなり、外科治療の4例全てがカルチノイドであった。

【結論】若年者肺癌では女性の比率が高く、腺癌が多かった。予後は内科・外科治療例ともに40歳以上と比べて差を認めなかった。

230 若年者肺癌症例の検討

国立療養所松戸病院

○高橋健郎、西山祥行、最勝寺哲志、大貫尚好、
西村光世、植松和嗣、西山敬一郎、富樫誠也、
北條史彦、林辺晃、児玉哲郎、西脇裕、阿部薫

【目的】当院における40才未満若年者肺癌症例の病態について検討した。【対象】1983年から1989年までの7年間の当院における肺癌症例は1492例であったが、その中40才未満の若年者症例34例(2.3%)を対象とした。【結果】男性23例、女性11例で、発見動機は、せき、血痰などの自覚症状29例、検診5例であった。組織型別では、扁平上皮癌3例、腺癌25例、大細胞癌3例、小細胞癌2例、その他1例であった。臨床病期は、1期5例、3 A期6例、3 B期11例、4期12例であり、1期と3 A期の11例が外科切除となったが、それらの病理病期は1期3例、3 A期3例、3 B期1例、4期4例であった。臨床病期3 A期と4期の症例の治療は、化療19例、放療1例、その他3例であった。予後は、外科切除例ではMST 368日、3生率45.0%、非切除例ではMST 171日、3生率4.5%であった。【結語】若年者肺癌症例34例を検討した。男女比は、およそ2:1と高齢者に比べ女性が多く、発見動機は自覚症状が多かった。組織型では腺癌例が多く、扁平上皮癌例は全て男性喫煙者であった。若年者肺癌における切除率は32.3%であったが、病理病期では、その大部分が進行例であり、非切除例も含めると、その予後は、極めて不良であった。

232 高齢者肺癌(70才以上)とその推移 — 日本病理剖検輯報(1958~1987年)による検討 —

浜松医科大学病理学教室 ○森田豊彦

目的：演者は第24回以来本学会で日本病理剖検輯報の肺癌症例を中心に肺癌例の推移、肺癌含む重複癌、肺多発癌、気管癌と気管分岐部癌、肺肉腫等につき報告してきた。今回は剖検輯報の高齢者肺癌につき検討報告する。方法：日本病理剖検輯報第1~30輯(1958~87年度症例)に登録された年齢・性別の明らかな肺癌症例につき病理組織型を含み検討し、若年者(40才未満)及び中年者(40~69才)との比較を行い、10年区分(第1~3期)してその推移を見た。

結果：1) 全体の傾向 70才以上症例は期別に男性1,039、3,793、11,013例、女性320、1,220、3,451例と増加が著明である。肺癌例中の割合も期別に男性20、32、44%、女性18、29、44%と漸増している。特に70才代は期別に男性18~36%へ、女性15~33%へと著増した。

2) 男女比 肺癌全体の男女比は3.0前後だが、高齢者のそれは3.1~3.2、中年者は2.8~3.2と高く、若年者の1.7~1.8に比し有意に高いと言えた。

3) 若、中、高年齢者組織型割合 男女とも若、中、高の順に腺癌は漸減、扁平上皮癌と小細胞癌は漸増する。高年齢者群は他2群に比し、男女とも腺癌が有意に少なく、扁平上皮癌が有意に多い。

4) 高年齢者肺癌組織型割合とその推移 30年間の合計で男性では扁平上皮癌37%、女性腺癌50%が最も多いが、男性の扁平上皮癌は期別に33~37%へ漸増、女性腺癌は45~51%へと漸増していた。